報恩の辞（読み下し文）

明治三十六年九月、我が立子山村小学校長朝河先生は、年六十に近き一朝を以て職を辞して去る。

先生、名を正澄、旧(もと)は二本松藩士にして、資質は坦厚、栄利はその心を動かすに足らず、毀誉はその情を乱すこと能わず。終始一誠を以て、自らを欺かざるを帰と為す。

明治七年、天正寺に学校を創立するに、先生を延(ひ)いて師と為す。爾来三十年、教えを受くる者一千余人。先生職に当たりて解かず、訓蒙して英を養い、機に随いて奨導す。事に因りては啓沃し、従容として迫らず。相感じて誠をもって教育し、此れによりて振起す。年歳の久しく、薫陶の厚く、孝愛友悌にして、一村の村中を弟子とせらるるにより、相語らうに、先生と称するは問わずして朝河先生たるを知り、その父兄もまた先生と称して名をよばず。蓋し人の徳の深化を人の功の至とするを非が入るとせば、豈に能くかくのごときや。

倩(つらつらと)と今の教員を視れば、口には道を講(と)くと雖も、心には則ちただ利をして是れを規とし、増俸をもって之を邀(むか)える者あらば則ち就く。故に朝には某校にありて、夕には某校に遷る、それ学校を視れば伝舎の如く、弟子を視れば市の道を以てす。是れに由りて師弟は親しまず、教導に効無し。他日、弟子の旧師を視るに同席比肩の友に異ならず、甚しきは則ち、行道の人のごとく、曾て謀面せず、てへり。徳義は地を掃らい偸薄(とうはく)たり。成風は師の授くるところにして、弟子の受くるところは、果して何の道哉。三十年間一校に従事せば、師弟の親愛は、我が朝河先生その人のごときたるは鮮やかなり。

今は先生、挂冠(けいかん)して帰郷す。生等留めんと欲するも能わず。なお寒さに裘(かわごろも)を去り、赤子は怙恃を離れて茫たるか、為す所を知らざるなり。すなわち相ともに議し、将に遺愛の碑を立て、その功徳を書し、以てわが思いを慰め、以て後の人に俾(ひ)せん。ここに憲先生之れを聞きて峻拒して許さず。ここに於いて更に議し、金殻の測時器を一儀として奉呈し、もって微衷を表するも報ゆるに匪(あら)ざるなり。永く矢(ちか)って諼(わす)れず、書を遂げて以て贈と為す。生等、稽首再拝す。

　維に明治三十六年九月下浣(げかん)

＜字句解説＞

字句の意味は『大漢和辞典』、『日本国語大辞典』を中心に参照した。

帰：身のよせどころ。（大漢和）

不解：「不解衣帯」（「帯を解かないこと。転じて、寝る暇の無い喩え」大漢和）の意か。

啓沃：人を導き教えること。心を開き、思うことをかくさないで主君に申しあげること。（日国）

従容：ゆったりとしたさま、くつろいださま。ひまでいること。しづかに言ふさま。（大漢和）、物静かなさま、ゆったりとしたさま（日国）

迫：せまる、ちかづく、きびしい、あわてる、いそぐ、うながす。（大漢和）

従容不迫：落ち着きはらって慌てない様子。（ポケットプログレッシブ中日辞典）

非が入る（ひがいる）：非難される（日国）

邀：むかへる、まちうける。まねく。もとめる。（大漢和）

伝舎：宿駅・宿場の旅館。駅舎。（日国）

謀面：面謁する。面貌を見て職を与える。ご機嫌をうかがう。（大漢和）

偸薄：とうはく＝人情がうすい、薄情（大漢和）人情が薄いこと。世間の風潮が薄情で不誠実なこと。（日国）

成風：普請をすること。家などを立派につくりあげること。また、立派にできあがること。立派にととのっていること。（日国）

巧な工作、又は人に詩文の添削を乞ふにいふ。（大漢和）

挂冠：制服を脱いで柱にかける→官を去り職を辞すること（大漢和）

測時器：時刻をはかる器具。とけい。（日国）

一儀：いささかの気持ち。寸志、一件（日国）

微衷：自分のまごころ・本心をへりくだっていう語。（日国）

永矢弗諼：永く矢（ちか）って諼（わす）れず

弗＝もとる。おさめる。ず、あらず、不に通ず（不より強いともいふ）。（大漢和）

矢：ちかう＝誓に通じる（大漢和）

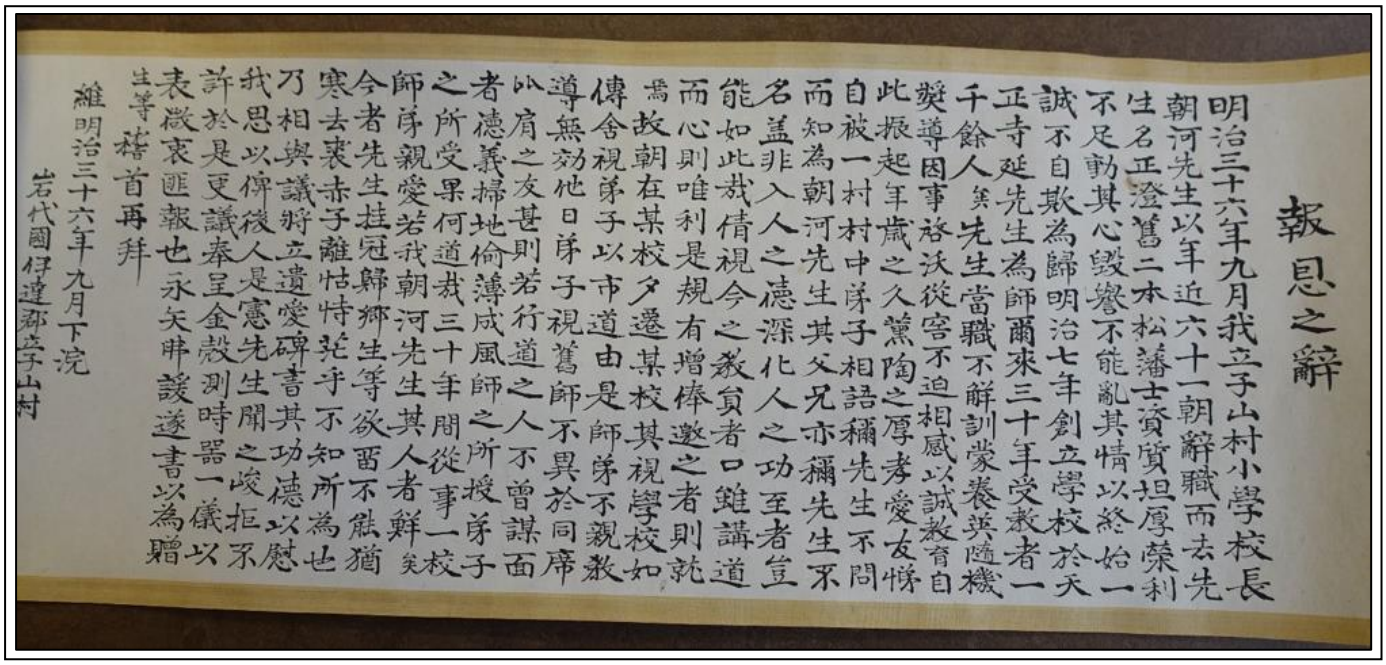
諼：わすれる＝忘に通じる（大漢和）

稽首：書簡の末尾に用いて、相手に敬意を表わす語。頓首。（日国）

再拝：書簡文の終わりに相手に敬意を表して用いる語。（日国）

下浣：げかん＝毎月の二一日以後月末まで。下旬。かかん。かかん＝毎月の二〇日以後。下旬。げかん。（日国）

（早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成）


報恩之辭

明治三十六年九月我立子山村小學校長
朝河先生以年近六十一朝辭職而去先
生名正澄舊二本松藩士資質坦厚榮利
不足動其心毀譽不能亂其情以終始一
誠不自欺為歸明治七年創立學校於天
正寺延先生為師爾來三十年受教者一
千餘人矣先生當職不解訓蒙養英隨機
奬導因事啓沃從容不迫相感以誠教育自
此振起年歳之久薫陶之厚孝愛友悌
自被一村村中子弟相語稱先生不問
而知為朝河先生其父兄亦稱先生不
名蓋非人之德深化人之功至者豈
能如此哉倩視今之教員者口雖講道
而心則唯利是規有增俸邀之者則就
焉故朝在某校夕遷某校其視學校如
傳舍視弟子以市道由是師弟不親教
導無効他日弟子視舊師不異於同席
比肩之友甚則若行道之人不曾謀面
者德義掃地倫薄成風師之所授弟子
之所受果何道哉三十年間從事一校
師弟親愛若我朝河先生其人者鮮矣
今者先生挂冠歸鄉生等欲留不能猶
寒去裘赤子離怙恃茫乎不知所為也
乃相與議將立遺愛碑書其功德以慰
我思以俾後人是憲先生聞之峻拒不
許於是更議奉呈金殼測時器一儀以
表微衷匪報也永矢弗諼遂書以為贈
生等稽首再拜

維明治三十六年九月下浣
岩代國伊達郡学山村

（写真提供：甚野尚志氏）

報恩の辞（読み下し文）

明治三十六年九月、我が立子山村小学校長朝河先生は、年六十に近き一朝を以て職を辞して去る。先生、名を正澄、旧(もと)は二本松藩士にして、資質は坦厚、栄利はその心を動かすに足らず、毀誉はその情を乱すこと能わず。終始一誠を以て、自らを欺かざるを帰と為す。明治七年、天正寺に学校を創立するに、先生を延(ひ)いて師と為す。爾来三十年、教えを受くる者一千余人。先生職に当たりて解かず、訓蒙して英を養い、機に随いて奬導す。事に因りては啓沃し、従容として迫らず。相感じて誠をもって教育し、此れによりて振起す。年歳の久しく、薫陶の厚く、孝愛友悌にして、一村の村中を弟子とせらるるにより、相語らうに、先生と称するは問わずして朝河先生たるを知り、その父兄もまた先生と称して名をよばず。蓋し人の徳の深化を人の功の至とするを非が入るとせば、豈に能くかくのごときや。倩と(つらつらと)今の教員を視れば、口には道を講(と)くと雖も、心には則ちただ利をして是れを規とし、増俸をもって之を邀(むか)える者あらば則ち就く。故に朝には某校にありて、夕には某校に遷る、それ学校を視れば伝舎の如く、弟子を視れば市の道を以てす。是れに由りて師弟は親しまず、教導に効無し。他日、弟子の旧師を視るに同席比肩の友に異ならず、甚しきは則ち、行道の人のごとく、曾て謀面せず、てへり。徳義は地を掃らい偷薄(とうはく)たり。成風は師の授くるところにして、弟子の受くるところは、果して何の道哉。三十年間一校に従事せば、師弟の親愛は、我が朝河先生その人のごときたるは鮮やかなり。

今は先生、挂冠(けいかん)して帰郷す。生等留めんと欲するも能わず。なお寒さに裘(かわごろも)を去り、赤子は怙恃を離れて茫たるか、為す所を知らざるなり。すなわち相ともに議し、将に遺愛の碑を立て、その功徳を書し、以てわが思いを慰め、以て後の人に俾(ひ)せん。ここに憲先生之れを聞きて峻拒して許さず。ここに於いて更に議し、金殼の測時器を一儀として奉呈し、もって微衷を表するも報ゆるに匪(あら)ざるなり。永く矢(ちか)って諼(わす)れず、書を遂げて以て贈と為す。生等、稽首再拝す。

維に明治三十六年九月下浣(げかん)

（早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏作成）